

【論文】

2 つの事例に見る戦後開拓の実態

^{だんやま} ^{ちふり}
～段山開拓地と千振開拓地から～

The Actual Situation of the Postwar Reclamation
- From the Analysis of the Two Cases, Danyama and Chifuri -

齋藤多美江
SAITO, Tamie

キーワード：引揚者緊急開拓事業；小豆島池田；那須町；満州開拓団；宗光彦

Received: 2013. 11. 11 Accepted: 2013. 12. 16

1. 終戦直後の社会情勢

1.1. 緊急開拓事業の概要

第 2 次世界大戦後の引揚者救済のための開拓事業は、敗戦後の混乱期を象徴する国家政策の 1 つであった。全国各地で行われた開拓事業は、現代からは想像もつかない貧困と過酷な肉体労働のなかで展開され、成功と失敗の明暗を分けたのである。筆者は性格の異なる 2 つの開拓地について、自分の体験をもとに調査することでその要因を探った。小豆島の開拓事業についての考察は、瞥見する限り他に見当たらない。

終戦直後に政府が実施した引揚者緊急開拓事業は、引揚者はもとより、広くは戦争によって生じた生活困窮者の救済を目的としていた。この事業による開拓地への入植者は、1948(昭和 23) 年をピークに、その後は減少しつつも 1955(昭和 30) 年まで続いた。敗戦による経済状況の悪化は物資の不足やインフレによって深刻化し、無一物で開拓に従事した人々を苦しめたのである。

『香川県史 巻 7 現代』によると、政府の引揚者受け入れ業務は、終戦直後の 1945(昭和 20) 年 8 月 23 日に、当時の厚生省に復員対策委員会、9 月 20 日には次官会議の決定によって引揚民事務所がそれぞれ設置され、「内地以外の地域より内地に引揚をなす者及び内地より朝鮮または台湾に引揚をなす者（130 万人）に対する応急保護の実施」（原文のまま）という目的で始められた。

同年 10 月 18 日、GHQ（連合国総司令部）の指令によって、引揚に関する責任官庁を厚生省とすることが決まり、1946(昭和 21) 年 3 月、厚生省内に引揚援護院が設置された。この引揚援護院が同年 6 月 14 日に復員庁となり、さらに 1948 年 5 月には厚生省の外局として引揚援護庁となったのである。

厚生省引揚援護庁援護局は、1946 年 4 月の次官会議において「定着地における海外引揚者援護要綱」を決定し、この要綱に基づき都道府県庁に地方事務所、市町村役場に引揚者相談所を設置して、就職、住居、生活問題の処理にあたった。このとき示された 10 項目にわたる援護施策の 1 つに、「引揚者の就農地として開拓地への入植斡旋」という項目があった。

こうして終戦直後の混迷期に発足した緊急開拓事業は、5 年間に約 155 万ヘクタール (155 万町歩) の開墾地と、10 万ヘクタール (10 万町歩) の干拓地を拓くことで完成を目指した。これを米に換算すると約 210 万トン (1,402 万石) の増産となる計画で、海外引揚者を中心に 100 万戸を入植させて、戦後生活の基盤の確保と、食糧危機からの脱却を図ろうとしたのである。だが開拓という本来長期的に取り組むべき事業において、いかに緊急対策とはいえ、この計画が早急に過ぎたことは、その後離農者が続出したことで明らかである。

『戦後開拓史 資料編』(6-7 頁)によると、当時の農林大臣が委託した農地開発事業は、「緊急開拓事業を促進する目的をもって 50 町歩以上の地区 (農林大臣が適当と認めたときには 50 町歩未満の地区) について農林省が委託する」となっており、この事業の委託先は、①農地開発営団 ②都府県 ③市町村 ④農業会 ⑤その他農林大臣が適当と認める者、と規定されていた。しかし地方によっては適正な耕作地の有無、入植者の指導体制など受け入れに対する構えにかなりのばらつきがあった。

1.2. 困難を極めた土地の確保

GHQ は終戦直後から、地主制 (小作制度) の廃止を含む農地改革を勧告し、政府もこれを進めた。マッカーサーは日本の民主化のための 5 大改革の実施を要求したが、農地改革については細かい指定をしていたわけではなかった。ただ地主制の改革によって自作農を多く生みだしたことは、教育制度の 6・3・3 制の導入と並んで、民主化政策のなかでもっとも早く実施され、成功した例だとされる。ここで注目すべきは、農地改革については、日本政府の積極的な取り組みが見られたことである。

政府は 1946 年 10 月に「自作農創設特別措置法」(第 2 次農地改革)を実施したが、民有地の開放折衝は順調には進まなかった。それを半ば強制的に買収し、山林原野を開拓適格者に売り渡し始めたのは 1948 (昭和 23) 年末である。

民有地については、その多くが従来から里山として利用されており、それを開拓者のために明け渡すことを地元の人々は強く拒んでいた。そのため開拓者は必然的に里山を越えたさらにその奥に、適地を探さなければならなかった。

2. 戦前戦後の食事情

2.1. 農地の荒廃と引揚者による人口増加

日本の食事情の悪化は、太平洋戦争勃発以前から始まっており、1940 (昭和 15) 年 4 月に

は、東京や大阪の大都市で、生活必需品の 10 品目が配給切符制になっていた。この品目には米、麦、味噌、砂糖が含まれていて、都市の食糧不足はかなり深刻な状況になっていた。戦時中には統治下の台湾、朝鮮半島から国内食糧の 20%を移入していたが、敗戦後はこれらが完全に途絶え、経済状態が極端に悪化した。

アメリカを中心とする占領国は日本に対して食糧援助を行ったが、アジアを中心に多くの国も戦禍で疲弊しており、食糧を輸出してくれる国は極めて少なかった。これに加えて終戦後日本の人口増加が食糧事情をさらに悪化させた。

当時の厚生省社会援護局の資料を見ると、1945(昭和 20)年 8 月 15 日に国外に居た日本人は、軍人、軍属(軍人以外の軍所属者)および民間人を合わせて約 660 万人であった。そのうち祖国の土を踏んだのは、軍人、軍属が 310 万人、民間人は 318 万人となっている。敗戦国ドイツと並ぶ、こうした形の国民の引揚げは世界的に例がなく、その受け入れは日本にとって困難な大事業であった。

2.2. 小豆島の人口増加

筆者が終戦直前の上海に父を残して家族で引揚げた小豆島では、戦前の人口は約 4 万 8 千人だったが、戦後は復員軍人や都市からの疎開者、空襲被災者、海外引揚者などが縁故を頼って身を寄せ、小さな島の人口は 1947 年には 6 万人を突破していた。当時は一軒の家に 2 所帯、3 所帯が同居するのも珍しくなかったが、食糧に関しては自らの家族が食べるのが精一杯で、身内とはいえ無一物の家族をいつまでも受け入れられる状況にはなく、引揚者の多くは緊急に生きる場所を探す必要に迫られた。

1946(昭和 21)年 3 月に行われた GHQ の調査では、当時の東京では配給物資による 1 日のエネルギー量は 1132 カロリーと算出されている。これは成人の基礎代謝量の 1/10 にも満たない数値であった。人々は命を支えるために法外な価格を承知して、ヤミの食糧を買出しに行くより方法はなかった。戦後の復興によって経済が好転しはじめ、食生活が豊かになってゆくのは 1950(昭和 25)年以降である。

3. 小豆島町池田の^{だんやま}段山開拓地

3.1. 段山開拓地の特異性

農林省が香川県に指示した開拓目標は約 4 千ヘクタール(4 千町歩)であった。古くから農地の開発が盛んであった香川県には、「耕して天にいたる」という言葉がある。

平地の少ないこの県は土地のほとんどを耕作地として利用し尽くしており、旧軍用地以外に残された土地は急斜面の山間僻地で、土の質も悪く、新規の開墾はいずれの地でも困難をきわめた。農林省は開墾して耕作地とする土地の斜面は原則として斜度 15 度以内と指定していたが、段山開拓地では 15 度を超える急斜面も多かった。

『開拓のあゆみ』によれば、段山で正式に開拓に着手したのは 1946(昭和 21)年で、旧池

田町有地と民有地にまたがる 135 町歩とある。入植計画の戸数は池田開拓農業協同組合として 27 戸で、1 戸当たりの耕作面積は約 5 ヘクタール（約 5 町歩）である。計算上では小豆島の既存農家が 1 町歩に満たないなかで、夢のように広い面積であった。

しかし当の『池田町史』には、段山開拓地に関する記述は付記として 731 頁にわずかに数行あるにすぎない。「太平洋戦争後の食糧不足の時代に当段山の開墾が行われた」とあり、入植者数も、「香川県相生村（引田町）の 50 から 60 家族によって 3 区画に分かれて開墾が行われた」とある。

『池田町史』による入植者数は、対象地をどこまでとするかによって違いが生じてくるもので、通称段山と呼ぶ地域には、別に中山と呼んでいた開拓地があり、そこには満州開拓団から香川県の相生村に引揚げた若いグループが入植していた。これを入れると開拓者の戸数は 50 から 60 戸になる。しかしここは耕作不適の地だったため、段山の後を追うように離農して現存していない。

池田（当時池田町）の場合、その後の市町村合併を繰り返す過程で、すでに打ち切られている開拓地の資料は処分されていて、現在の小豆島町池田の役場から開拓当時の資料を得ることはできなかった。そもそも段山開拓地は 1946(昭和 21)年制定の緊急開拓事業実施要綱に基づく、国営代行事業地区であったにもかかわらず、実際の事業主体は四国本土の香川県農業会で、事業主体自体が島になかったのである。したがって県の離島である小豆島の山頂と、香川県高松市にあった農業会との物理的な距離はあまりにも遠く、事務連絡、農業技術の指導、耕作機器の補助等々の情報提供を書類に頼っていた当時、一日一往復の連絡船による書類のやり取りでは情報が十分にゆき届いていなかった可能性は極めて高い。

段山への入植者は、敗戦まで日本の租借地であった上海や青島など大都市に進出していた大手紡績会社の社員とその家族、あるいは日本統治下の台湾や朝鮮半島の日本人小学校の教師、満州で開拓に携わった人たちなど、多くの引揚者に加え、高松など日本国内の空襲で家や職を失った戦災者や地元の人たちによる、混合集団であった。したがって大多数は農業未経験で、過去の生活環境も大きく違っていたことから、開墾も家族単位で行うことが多かった。

今回の調査と取材では、成功した開拓地の多くが、満州開拓団時代の旧組織を引き継ぎ、引揚げ後も一定の統率力と、政府との強い繋がりを保持していた集団であることが分かったが、この点からも、段山開拓地は、全国で展開された開拓事業のなかでも特異な例であったと言える。

3.2. 小豆島の地形と自然環境

『池田町史』によると、東部瀬戸内海に浮かぶ小豆島が所属する香川県は、全国第二位の島嶼県で、島数は 117 島を数える。そのうち有人島は大小合わせて 36 島、その筆頭が小豆島である。無人島 81 島のうち 23 島が小豆島の属島で、島の面積は約 170 平方キロである。

小豆島の地形は、西日本の大骨を形成する大地質構造の領家帯と山陽帯が基盤で、度重なる噴火活動によって構成された小豆島層群は噴出時期や化学組成の違いから、内海累層と寒霞溪累層に区分されている。島の景勝の地、寒霞溪の魅力の1つは、火山活動が残した荒々しい岩肌の妙と紅葉とのコントラストの美しさであろう。入植者のすべてが離農に終わった開拓地は、この寒霞溪累層の地層をもつ嶮岨山山系の、標高 618.4 メートルの支脈、通称段山と呼ばれる溶岩台地であった。

嶮岨山山系の行政区は、小豆島のほぼ中央にある小豆郡池田町（現在は合併により小豆島町池田）に属し、段山への主な登山口は町の北部が嶮岨山山系に繋がるこの池田町にあった。海に沿って広がる農村地帯から一気に始まる山路は急峻で、現在は山林に覆われて、かつての山道を山頂までたどることはできないが、立派な舗装道路を車で難なく行ける。池田町から見上げる段山は、頂上が屋根の形をしたどっしりと据わりの良い山である。

池田町は全体の約 70% が山林で平地は少ない。当時の年間降雨量は約 1144.2 ミリで、夏に偏って降ることから慢性の水不足に苦しんできた。島民は溜池を掘って農業用水を確保しているが、池田町にもそうした池が幾つかあった。段山はそれらの池に水を落とす貴重な水源地であったが、その山頂を開墾した開拓者には生活水の運搬という苦勞がついてまわった。

3.3. 標高 600 メートルの生活登山路

段山の地質は溶岩流によって形成されたとされるが、1946 年当時開拓地を選定するにあたって、こうした事実が考慮された可能性は少ない。選定の基準として、段山溶岩台地は 5 度から 15 度の緩やかな傾斜地で、土地条件は比較的良いことから開拓地となったことが、香川県の『開拓のあゆみ』に記されている。

未開の山林を拓くには、まず山頂までの道づくりが先決であったが、入植者の男たちは町の助けを借りて、猫車（薪を切り出すための 1 輪車）しか通れない道を、何とか人が荷物を背負って通れる道に普請した。その上で、配給の食糧、日用品、肥料、ときには農家で手に入れたヤミの食糧から郵便物まで、すべてをそれぞれの家族が背負って運び上げた。荷物の重さは元気な若者では常に 30 キロを超え、女や子どもも 5 キロから 10 キロを背負子で運び上げた。若者たちは手作りした特大の背負子に自分の頭の上まで荷を積み上げて、登山口から山頂まで 2 時間弱の急勾配の道を、這うようにして登ったのである。

3.4. 段山の人びと

開拓地は山の頂上に位置するために季節風の影響を強く受け、冬は寒さが厳しく、春から夏は山一帯が霧に覆われることも少なくなかった。吹き荒れる日の風の方向は定まらず、ひと晩中吹きさらされる作物は、根元の土を播鉢状にえぐられる。しかし、晴れ渡った日の岩が切り立つ南の斜面は、四季を通じて絶景であった。茱萸の実る頃、甘い実を口いっぱい頬張り、「ほんとうにここで農夫になる覚悟があるのか」と、自問自答したのもこの崖であった。

段山の開墾は、まず各家庭の父親と息子たちによる共同生活から始まった。井戸を掘り、山林を伐採して、何とか生活できる空間にテントを張り、そこからそれぞれに割り当てられた自分たちの土地に通って、家族を迎えるための住居を建てた。出来上がったものは働き手の数や父親の性格、技量などによってそれぞれに個性のあるものだったが、家と呼ぶにはあまりにも粗末な小屋であることに変わりはない。

どの家もまったくの素人作業だったが、当時の父親たちはこれくらいの手仕事は心得ていた。風呂はドラム缶に浮いてくる底板を自分の足で踏み敷いて入る露天風呂で、数軒が共同で使用した。

段山は秋口から春先まで、気温の低い日が続く。ことに夜の気温は氷点下 10 数度まで下がり、暖を取る工夫は必須であったが、段山には一軒だけ満州開拓団からの引揚者がいて、その人から満州式のオンドル造りを習い、凍てつく夜をしのいだ。

開拓地に電気設備はない。入植者の電気導入に対する要望は切実であったが、開拓事業予算の一部に、「農山漁村電気導入促進法」が制定されたのは 1952(昭和 27)年で、段山開拓地ではすでに多くの離農者が出た後であった。電気のない山の夜は、月明かりとわずかな配給の灯油ランプの灯りだけが夜の頼りだった。日の出とともに起き、日が沈むまでに夕食を済ませてしまう夜は長い。西南に伸びた夜の尾根に立つと、真っ暗な海の彼方ちらちらと岡山の街の灯が見えていた。わが家では、海軍の予科練から復員した長兄がランプの下で毎夜声を出して読む、中里介山の『太菩薩峠』などを皆で聞きつつ、開墾の疲れに誘われて眠りに就くのが常だった。

オンドル造りを指導した若い夫婦には小学生から幼児まで、5 人の子どもがいた。子どもたちは親を助けて健気によく働いたが、満州から引揚げの際に一番下の乳呑児を満州の知人に預け、命の危機を体験して祖国に帰り着いた家族であった。幼い兄弟は満州に残した妹がどうしているかと、いつも心を痛めていた。それでも農夫として最も自信に満ちていたのはこの家族であった。

多くの父親たちは根っからのサラリーマン家庭の父親として、敗戦の日を境に逆転した立場に立たされ、なりふり構わず一家の糧を手に入れる生き方へと転換するのは容易ではなかった。そんな父親に代わって開墾生活で力仕事を支えたのは若い息子たちだった。

開拓地の幼い子どもたちは、引揚げの時点で突然学業を中断されたが、帰国後も住居が定まらないなどが原因で、小学校の休学を強いられていた。麓の池田町第一小学校の分校として嶮岨山分校が設立されたのは、1949(昭和 24)年のことである。開拓地の分校は、入植者がもっとも待ち望んでいたものであった。しかし中学生は、標高 600 メートルの山を毎日登り下りして池田中学校に通い、帰りは必ず配給物資や生活用品を背負って山の家に帰る日が続いた。

杉皮で屋根を葺いた粗末な分校は、子どもたちに元気を与えたばかりでなく、山で唯一の文化施設となった。それまでの家族主体の繋がりから、同年代の横の繋がりが広がり、若者たちはガリ版刷りの小冊子「若人」を出して、詩や随筆めいた文章を発表することで

鬱積した青春を発散させた。

3.5. 作物の不毛、離農、下山

畑には里の池田町の農家にならってまず小麦を蒔いた。2月には待望の青い芽が出そろい、家族そろって麦踏みを楽しんだ。だが本来ならばぐんぐん伸びる春になっても麦の丈は伸びず、15センチから20センチに止まり、池田町で麦刈りが始まって開拓地の穂先は一向に太らず、白穂となって収穫は全く望めなかった。

酸性の強い土壌が大きな原因で、土壌の改善には時間と大量の肥料が必要だったが、この時代は肥料そのものが不足しており、たとえあったとしても、重い肥料を山頂へ運ぶ道路も手段もなかった。また農業指導者も山にはやってこなかった。未経験者の集団が、具体的な農業指導を受けるシステムがないなかで、あれこれと模索する毎日が続いたのである。この状態は甘藷や葉煙草など、池田町にならって栽培した作物全般におよんだ。母親たちが家族のために丹精する小さな野菜畑からさえも、山頂に吹く強風が、一夜のうちに葉も実ももぎ取って行った。

山の人たちは情報を得る手段が何もないなかで、次第に将来への不安を募らせ、1950(昭和25)年頃から、落ち着き先の目途がついた人たちの離農が始まり、人びとは次々と島を去って行った。引揚げ以来の苦労から体調を崩す人たちも出ていた。開拓者は医者も居ない山に限界を感じはじめて、一気に下山へと傾いていった。わが家でも落ち着き先が決まった1951(昭和26)年春、離農して下山、開拓地での生活は5年あまりで幕を下ろした。私たち家族はやはり都会の水に住み慣れた魚であり、大阪郊外の家から戦後二度目の再出発をしたのだった。

段山開拓地では、残留入植者の数が12戸となった1958(昭和33)年、池田町が酪農振興による再開発計画を試み、入植者の再募集を行ったが、入植希望者は皆無だったという。その後この地域を襲った集中豪雨で開拓地は決定的な打撃を受け、1963(昭和38)年開拓不要地として旧所有者の池田町に売り渡されたのである。

3.6. 段山開拓地のその後

筆者は開拓地のその後を見たいと思い続けていたが、1995(平成7)年にその機会が訪れた。山頂まで舗装された道を車で走り、かつて開拓地の入り口になっていた分校の跡地あたりに降りたとき、45年前の記憶を呼び戻すのに時間がかかった。目の前にあったのは見渡す限り近代的な高原のリゾート地だった。

10階建ての高級リゾートマンションは、プール、サウナ付大浴場、スポーツ施設を完備していた。手桶一杯の水に苦労した日が夢であったように思えた。周りには豪華な貸別荘が点在し、それらの別荘を結ぶ舗装道路が迷路のように走り、わが家の拓いた土地を探すには地形から推測するしかなかった。それは観光開発会社の投資により小豆島ヴィラとして売り出され、経済成長の波に乗った段山の姿だった。この山の苦難の記録を残しておきたいと考えたのはこのときであった。

しかしこの研究のために再び取材に訪れた 2010(平成 22)年 10 月、ここにも不景気が影を落としていた。マンションと施設は残っていたものの、数軒の大きな別荘を除いて多くは朽ちたまま板付けされ、樹木と笹藪に覆われていた。「猿に注意」の看板が立つ山頂を車で走っていると、子を連れた鹿が前を横切った。

4. 千振開拓農業協同組合

4.1. 満州開拓地からの引揚げ

栃木県那須郡那須町、千振開拓農業協同組合の歴史を知るため、『那須町誌 後編』の「戦後の開拓」を開いたが、その冒頭部分にも行政側の資料不足が記されていた。だが千振開拓地の場合は、組合員によるしっかりした記録が残されていた。

千振開拓地では入植以来 10 年ごとに、戦後開拓の歴史を綴った手作りの機関誌を発行しており、ことに千振開拓 60 周年記念事業として編纂した『千振開拓 60 年のあゆみ』の平成 18 年度版には詳細な記録が残されている。筆者はこれを参考に現地を訪れると同時に、永年組合長の職にあった中込敏郎氏への取材を行った。本章ではこの取材を中心に述べる。

千振開拓地については中国東北部（旧満州）の開拓時代を抜きにしては語れない。そもそも千振の名前は 1933(昭和 8)年に第 2 次武装移民団として満州に渡った千振開拓団に由来する。このとき移民団長をつとめたのは、東京帝国大学農学実科を卒業して、南満州鉄道株式会社、通称満鉄に入社した宗光彦氏であった。

入植した満州の地は三江省樺川県の南部、七虎力（しちこりき）といった。この七虎力を現地の発音で読むと「チフリ」で、これを縁起のいい「千穂」の別名である「千振」と書き、満州に落ち着いた開拓団を宗団長は「千振屯墾団」と命名した。

ここで日本政府が満州に開拓移民を送り始めた経緯について簡単にふれておく。満州の開拓移民には 3 つの形態があった。1 つは日本の介入で「満州国」が建国された 1932(昭和 7)年に、試験移民として渡った武装移民である。当時は満州事変の余韻がまだ残っていて、日本の侵入に抵抗する勢力が開拓地に出没していた。ことに満州北部での治安は悪かったのである。そこで日本政府は内地の在郷軍人から募集して現地の治安維持を兼ねる目的で、1932(昭和 7)年から 1935(昭和 10)年までの 4 年間に 1700 人余を入植地に送り出した。満州の千振開拓団はこのときの第 2 次武装移民団で 1933(昭和 8)年に満州へ渡った人たちである。

その後は 1936(昭和 11)年に政府の満州移民計画によって、貧しかった日本の村や集落を分村分郷して数十戸から数百戸の単位で、家族ぐるみで移民した一般開拓民と、1938(昭和 13)年に義務教育を終えたばかりの 16 歳をふくむ、19 歳までの男子青少年が訓練を受けて満州へ渡った、満蒙開拓青少年義勇軍である。

満州開拓の歴史はこのように日本の軍国化のもとに計画された国策によったもので、日本の開拓民は中国の人たちにとっては、自分たちの土地に乗り込んできた異国の侵入者に

ほかならない。一方、軍事力によって国家の勢力を拡大しようとした日本にとって、満州移民団が開拓する広大な農地は大きな魅力であった。満州開拓はこうした衝突のなかで始まったことを明確にしておかなければならない。この事実を踏まえた上で、満州で千振開拓団の人びとが体験した引揚げ時の苦難の一部を記す。

千振開拓団の人びとが満州時代から今日まで一貫して心の支えにしてきたものは、宗光彦団長が掲げた五族協和の理念である。五族共和（五族協和）とは、岩波書店『広辞苑（第四版）』に「中国で辛亥革命当時、帝政を廃して五族による共和政体樹立を目指した標語」と書かれている。ただしこの標語を日本の開拓による植民地政策が利用したという批判はまぬがれない。

そうした状況下で宗団長が偉大な指導者として、千振開拓の人たちにいまでも慕われ続けているのは、五族協和の精神のもとに日本人が満州の地に同化することで、ともに満州国を築き上げることを実践したことにある。満州の農民を心から愛した宗氏は、日本の開拓民と満州の農民との接し方にまったく差別をつけなかった。宗団長は叱ることも褒めることも平等だったというのは、千振開拓の人たちに一致する言葉である。この態度に現地の人々も宗氏に深い信頼を寄せた。

武装移民団到着時には出沒する匪賊（この言葉は正しくないが当時は使われていた）と戦って戦死者まで出した。その相手の^{おき}長、謝文東が日本の敗戦時に命を懸けて残留開拓者を守り抜いたのも、宗氏への尊敬と深い親愛の念によるものであったことが、記念誌『60年のあゆみ』に記されている。こうした宗団長の五族協和の理念は、引揚げ後の那須町に、千振開拓農業協同組合の名とともに引き継がれたのである。

満州で迎えた敗戦の日の過酷な様子は、『60年のあゆみ』に組合員が寄せた回顧録からよくうかがえる。敗戦時のボッタム宣言は、軍人が武装解除した後の復員を保障していたが、一般在外邦人の引揚げについてはその保障はなかった。そのためとくに満州からの一般邦人の引揚げは悲惨な状況下に行われた。那須山麓に入植した多くの開拓者はこうした引揚者であった。

1933(昭和8)年に満州七虎力の開拓地に渡った人々は、日本を離れるときから大地に骨を埋める覚悟であった。厳しい北満の地に根を下ろし、苦難を乗り越えて安定期にあった農民が農地を手放すことの辛さは察するにあまりある。

日本の敗戦によるソ連軍の侵入を告げられた日に避難命令が出され、多くの人は一時的に難を逃れるための疎開という認識で家を出た。しかし状況は彼らの想像より深刻であり開拓民はそのまま恐怖に追われ、日本への逃避行が始まったのである。

回顧録には、耕した土地を死守しようと満州に留まる決意をした人たちを説得して、とにかく無蓋貨車に乗り、家族や仲間とはぐれ、「匪賊」やソ連兵の襲撃、栄養失調、伝染病の蔓延に襲われる中で、親や子供、兄弟を次々に亡くすなど、集結地にたどりつくまでの道程が記録されている。那須高原の千振開拓団にみる連帯の絆は、苦難のなかで支えあったことで一層強固なものになった。日本に無事帰り着けたなら、また皆で開拓をしようと

いう固い約束は引揚船のなかで交わされていたのである。

生きのびて祖国の土を踏んだ人たちは、一旦出身地の関東各地に落ち着いたが、満州で指導的な立場にあった人たちが、いち早く先遣隊を組織して入植地探しに動いた。農業に詳しい仲間が自分たちの足で歩き目で確かめて、希望する条件に近い土地として選んだのが栃木県那須郡那須町大字豊原であった。未開の原生林に鋤を入れ山菜で命を繋ぎ、飢えに耐えて 1946(昭和 21)年 11 月、千振帰農組合として日本での再出発をはたした。共同作業によって拓いた土地に家族を呼び寄せたのは 1947 年 12 月で、発足から 1 年が経っていた。

4.2. 那須町の地形と自然環境

『那須町誌 後編』によると、那須町は栃木県の最北東端、福島県に隣接する総面積 372.70 平方メートルの高原地帯で、第 2 次世界大戦後の那須山麓には、外地からの引揚者と国内帰農者など、多くの開拓団が入植して新しい酪農地帯を形成した。千振開拓地は那須山麓の高久陵域に属し、標高 1917 メートルの那須山茶臼岳を頂点に、南東に裾野を広げた標高 400 メートル台に位置する。

那須山麓は複雑な起伏をもっている。高久丘陵の基盤は初期の那須火山噴出物である凝灰岩類で構成されており、その上に火山成長期の噴出物類や新期那須火山噴出物の火山角礫や火山灰が堆積して丘陵地を形成した。さらにそこには小さな水脈が網の目のように走っている。

千振開拓地は緩やかな傾斜地で傾斜度は 12 度前後だが、広大な高原を歩いても勾配をほとんど感じない。しかし高久丘陵の地質は農作物の栽培に適した土壌とは決して言えない。那須高原は気候区のうえでは、日本列島の東海・関東型に分類されているが、東北・北海道型や北陸・山陰の日本海の影響も大きく受け、那須山特有の現象も加わり春の朝夕の冷え込みは厳しく、農作物は凍霜害を起こしやすい。

栃木県は数の上では開拓適地が多い県で、那須野が原に初めて鋤が入ったのは明治時代である。先人たちは豊かな水源を求めて、那須疎水の掘削事業を成し遂げた。しかし丘陵地帯の高冷と強風、水不足と火山灰の傾斜地など、水田農業に適さなかったことから広大な面積の土地が山林原野のまま残された。

こうした悪条件は小豆島・段山と同じだったが、千振では入植者全員が農業経験者で、農業に情熱をもつ農夫であった。旧満州で築き上げた強い組織力に加えて、地形的に緩やかな勾配が直接里地に繋がっていたことは段山との決定的な違いであった。

千振開拓地では完全な共同体制をとり、それぞれの体力に応じて、男女別の作業班、農耕班、炊事班に分かれ、当座の生活資金を得ることと、新しい開拓地への準備を並行して進めていった。共同作業によって開墾した土地は組合員で話し合い、標高差を考慮して 1 戸当たりの面積を約 4.7 ヘクタール (4 町 7 反) として、不足分を飛び地で補うことで各自の土地を決めた。この時点で共同生活を解散し、自分の土地に笹小屋を建て家族を呼び寄せたのである。

取材した中込氏は父母に連れられ7人家族で満州に渡ったが、1946(昭和21)年の帰国時には母親と妹の3人で故郷山梨県への引揚げだった。旧満州で4人を失ったのである。同年11月には20歳そこそこで先遣隊に加わり、翌年春には配分された自分の土地に三角小屋を建て家族を迎えた。

4.3. 営農活動と酪農への道

千振は酪農によって那須高原に1つの地域を築き上げたが、開拓を担ったのは、満州から一家を連れ帰った父親たち一世とその子に当たる二世で、中込氏は当時強力な働き手となった二世の青年たちを、自身を含めて一世半と呼ぶ。この一世と一世半の頑張りが大きかったのである。

開拓地初期の電気や水道の不備、道路状況の悪さは程度の差こそあれ、全国の開拓地に共通したものだったが、農業経営の面では突出した力をもっていた。注目されるのは早くから非出資の組合を立ち上げ、生活に関するものは個人、作業に関するものは共同で取り組むという区分をはっきりさせたことである。農業に必要な機器や肥料、家畜を一括購入し共同で使用した。新しいことに挑戦する場合は、まず組合でやってみるという合理的で手堅い方法をとった。

1950(昭和25)年には、開拓農家は1戸1万円を均等に出資して69万円を基金とする出資組合として独立し、自前の組合事務所も建てた。そしてこの資金によって組合員傷病共済制度を発足させるなど、組合員の営農活動を組合員で支えあう仕組みを定着させた。出資組合は当時の大蔵省の認可を受け、金銭業務を行う組合として成長していったが、このことは戦後開拓地としては異例のことであり、多くの開拓地ではまだ存続の可能性を模索していた時期であった。

火山灰を含む千振開拓地の土壌に、農作物が十分に育たなかったことは段山と同じだったが、酸性土壌改良事業を実施するとともに、農地の適正化を考えて農作物に不向きな土地を牧草地に切り替えるのはやかった。国の補助政策もうまく取り入れて、全国的にも凶作だった年を酪農で乗り越えたという。酪農の運営は満州時代の経験を生かしたもので、千振には家畜に関する専門家が何人かいた。

千振開拓地に乳牛15頭が導入されたのは1949(昭和24)年のことである。希望者に現物貸し付けの形で飼育が始まり、その後は生まれた雌牛を組合に一頭返すことで、貸与された牛が初めて自分のものになるという制度をとった。牛乳の販売は気象災害による農作物の不作時にも現金収入が得られるなど、その有利性が認識され酪農経営は急速に進んだ。

その後は那須山麓地域が集約酪農地域として指定され、順調に酪農地としての道を歩んできたが、その陰には開拓農業が戦後のインフレをのりこえる努力と、農機器や肥料の入手が容易になったこともあった。那須の酪農地帯にサイロの構築費補助などが決まったのは1955(昭和30)年度のことである。

4.4. 千振開拓地のその後

2010 年 10 月上旬に千振開拓農業協同組合取材で訪れた日は小雨模様だった。新幹線那須塩原駅から那須山麓に向かうバスは稲の収穫を終えた水田地帯を抜けて、唐黍畑（トウモロコシ）の収穫地へ入った。この辺りまでが旧来の農村地帯である。緩やかな丘陵をさらに奥深く進むと、木々の間に長く連なった牛舎や高いサイロが見えはじめ、酪農地では冬支度が始まっていた。

だが、那須高原にはもう 1 つの表情があった。それは観光リゾート地としてのそれである。結婚式用の洒落たチャペルをもつ教会、バカンス用のログハウスやペット同伴の施設を完備した会員制の高級ホテル、その他ゴルフ場や美術館などが舗装道路で結ばれており、ここでも開拓地をとりまく環境は大きく変わりつつあった。立派に成功した開拓地はいま新しい農業へどう舵を取るかという現実的な問題に直面している。千振でも農業後継者の問題が浮上し、乳製品の輸入増加による酪農の将来展望を描きにくい現状もある。さらに周辺環境の変化は農地の転売という問題に晒されている。満州時代から引き継がれてきた開拓当初の精神は次第に希薄になりつつあるのも事実である。そして開拓地が時代の波にのまれて姿を変えていくのは千振だけの現象ではないように見える。

5. 考察

段山と千振の 2 つの開拓地の成功と不成功を分けた要因は大きく 2 つある。それは地形によるものと、入植者が歩んできた歴史の違いであった。

まず地形については段山も千振も、火山による堆積物によって形成された地質であることは基本的に大きな違いはない。しかし千振は日本列島の本州に位置する那須連山の麓にあり、その裾野の豊かさは段山と比較にならない。那須高原は千振開拓団のほかにも、満州からの帰農開拓団をいくつも受け入れた懐の深さをもっており、裾野の先はゆるやかな傾斜地が直接里地に繋がっている。このことは段山との決定的な違いであった。

段山の場合は、瀬戸内海に浮かぶ小さな島の頂にある火山台地であったが、台地とはいっても一方が崖で、小さな尾根が三方に伸びている斜面を開墾したのであり、里地から孤立した開拓地であった。

里地と開拓地を結ぶ山道は大八車 1 つ通すことが出来ない。この山道の険しさのために若者たちの貴重な労力の多くが、生活物資を山に運び上げることに費やされたばかりではなく、島の農業をよく知る里地からの人々の足をも遠ざけた。農業未経験の開拓者は家庭菜園程度の知識で、厳しい島の山頂で初めての農業に立ち向かったのである。

2 つの開拓では土地選びの次元から異なっていた。一方は一般引揚者が途方に暮れて入植した開拓地であり、もう一方は農業に熟達した満州開拓者が現地を歩いて地味を確認したうえで、再び農業に挑んだ開拓地であるという違いがあった。

入植者がたどった歴史の違いから見ると、私たち家族が入植した段山の開拓地では、大

半の人々が都市生活の体験者であった。都市生活の中で身につけた個人主義的自立性によって、家族ごとに独自の方法で開墾を始め、無一物からの生活を大地に根を張ることで立て直そうとしたのである。しかし親たちの職業やそれまでの生活環境はそれぞれに異なっていた。敗戦による引揚げという大きな挫折を背負って、困窮する時代に家族を食べさせていくために開拓を選びとった父親たちに、千振の人々の持つ心意気がなかったとしても、無理もないことであつたろう。

こうした精神的な違いは、開拓を進めるうえで取り組み方の相違として、出発の時点から千振開拓地とは違っていたのである。千振ではまず組織作りから始め、それぞれの持ち味を生かした共同生活を立ち上げ、組織の力で開墾を進めた。さらに国の補助政策を有効に利用して、組合員の拠り所となる自前の農業協同組合事務所を設け、共同購入、共同使用、相互扶助の制度により、組合員が生活苦による孤立に陥らないようにサポートした。

段山の組合員は二十数家族（常に出入りがあり定数は定かでない）で、名ばかりの組合に依存する意識は薄く、組織の力で中央の農業政策に積極的に関わり、その力を借りようとする行動を起こさなかった。苦難を乗り越える原動力はそれぞれの家族の絆であつた。ここには山間僻地に位置する開拓地であることと、国家の農業政策をつなぐ人脈や通信手段が欠けていたことも原因となった。それぞれの家族は自分たちの土地を拓くことと食糧調達で精いっぱい、山頂の開拓地に自分たちの村落共同体を築いて行こうという、長期的な考えには至らないまま、作物の不毛と生活苦から離農に追い込まれたというのが、実情ではなかったかと考えられる。

当時の親たちにその真実を聞くすべはすでにないが、若者として開拓に携わった自らに同じことをいま問うてみても、まことに歯切れの悪い答え方しか出来ないのである。苦勞多くして、農業から得る喜びに接することができなかった私たちには、農業に対する夢は薄れ、不便な山の頂に生涯を懸けることの不安の方が大きくなっていった。日々の開墾には懸命に励んだが、そこに将来展望を描けるものを見つけ出すことが出来なかったのである。段山の大自然は克服し難いものではあつたが、その厳しさに負けた原因の1つは、こうした目的意識の希薄さ、曖昧さにあつたとも言える。農地は郷土を愛する人々によってこそ存続し得るものなのである。

一方千振の場合、満州に進出したことへの心の痛みは同じようにあつただろうが、自ら耕した北満の地は、祖国を捨てて新天地に築いた故郷であつた。その地に家族を葬り、家畜を放置して、後ろ髪を引かれる思いで満州を離れたのである。この人たちはみな北満の土をよく知り、農業が大好きで、家畜が可愛いくて仕方のない人たちであつた。千振の人たちの自立の精神は、しっかりとした農村共同体の組織のなかで育んだものであつた。その大切なものをもう一度取り戻そうと挑んだ人たちが、那須山麓に再び自らの郷土を創り上げたのである。そこには北満の地に骨を埋めた人たちへの深い鎮魂の思いが込められている。

参考文献

- 香川県 1976.『開拓のあゆみ』 香川県
- 香川県 1991.『香川県史 巻7 現代』 四国新聞社
- 川野正雄（編纂責任者）1984.『池田町史』 香川県小豆郡池田町
- 岸 康彦 1986.『食と農の戦後史』 日本経済新聞社
- 沓掛俊夫ほか7名. 1979「小豆島及び讃岐東部の領家帯」『地質学論集』第17号 47～68
- 厚生省援護局 1978.『引揚げと援護 30年の歩み』 ぎょうせい
- 戦後開拓史編纂委員会 1968.『戦後開拓史 資料編』 全国開拓農業協同組合連合会
- 戦後開拓史編纂委員会 1968.『戦後開拓史』 全国開拓農業協同組合連合会
- 巽 好幸 1983.「小豆島の火山地質」地質学雑誌
- 千振開拓 60 周年記念事業委員会. 2006『千振開拓 60 年のあゆみ』 千振開拓農業協同組合
- 那須町誌編纂委員会 1976.『那須町誌 後編』 那須町